

Title	ドイツ現象学的美学・芸術論の諸相と展開：フィードラー・ガイガー・オーデブレヒトを中心に
Author(s)	高梨, 友宏
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40511">https://hdl.handle.net/11094/40511</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	高 梨 友 宏 <small>たか なし とも ひろ</small>
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 3 4 9 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 9 年 12 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 芸術学専攻
学 位 論 文 名	ドイツ現象学的美学・芸術論の諸相と展開 —フィードラー・ガイガー・オーデブレヒトを中心に—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 神 林 恒 道 (副査) 教 授 上 倉 庸 敬 教 授 里 見 軍 之

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文がまず目指したものは、ルドルフ・オーデブレヒトとモーリッツ・ガイガーに代表されるドイツ現象学的美学思想の諸相を検討すること、次いでコンラート・フィードラーの芸術学理論を広義の現象学的芸術思想として再解釈したうえで、その展開の可能性を二つの方向、つまりマルティン・ハイデガーと西田幾多郎の思想において想定しようとしたものである。

「第一章 ルドルフ・オーデブレヒト研究 —超越論的主観性の美学—」では、フッサールの中期超越論的現象学の立場に依拠した美学者オーデブレヒトの美学思想を取り上げ、その美的主観の超越論的構造の特質を明らかにし、その美学思想の全体を概観しようとしている。「第二章 オーデブレヒトの現象学的美学 —独我論的解釈からの擁護—」では第一章で眺められたオーデブレヒトの美学思想について、これが新カント主義のコーエンとの関わりからしばしば被ってきた独我論的解釈という批判に対して、その固有の美的=超越論的主観性の現象学的意味を明らかにしようとしたものである。「第三章 現象学的美的価値論の可能性 —オーデブレヒトおよびガイガーに基づいて—」では、二者の美学思想を「価値美学」の視点から捉え、その批判的的価値体験理論を対比的に論じようとしている。この両者の見解の対立を、論者は止揚しようとするのではなく、現象学的美学の展開の流れの中で、相補的關係にあると捉えている。「第四章 フィードラー芸術論再考 —現象学的美学・芸術論の観点から—」と「第五章 『芸術論』としての西田哲学 —フィードラー芸術論の一展開様相—」は、前の第三章まで関わってきた狭義の現象学的美学思想の境域を拡張しようとする志向に基づいてなされた、すなわち、より広い意味での現象学的思想を射程に入れた考察である。その際、フィードラーは現象学的芸術思想の起点に立つ人物であると見なされる。さらにそこから、論者はこのフィードラーの思想のうちに、狭義の現象学的問題領域を超えて、ハイデガーの存在論的芸術論や西田の身体論的芸術思想に結びつく可能性を探ろうとしている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文についてまず評価されるべきは、わが国ではその研究者の数からしてもきわめて限定される「ドイツ現象学的美学」についてのひとつの総括的な研究であるということである。もちろんこれまでも、この分野でのテーマ的研究や個々の研究者の著作に言及した個別研究はなかったわけではないが、本論文のように、現象学的美学を歴史的にその展開を跡付けつつ、さまざまな角度から比較検討を加え、その全貌を明らかにした研究は少ない。また本論文は単なる歴史研究に留まらず、さらに近代芸術学への応用と展開の可能性をも示唆している。その際、論者が着目しているのが、フイードラーの芸術論である。わが国で早い時期に、このフイードラーの芸術論に注目したのが西田幾多郎であった。論者は、そこから「芸術論」としての西田哲学の新たな解釈の可能性を示唆しているが、これもまた、本論文のユニークな特長である。

本論文の構想を図式的に眺めるならば、タイトルが示すように、フッサールの初期現象学を踏まえたガイガーから中期のフッサールの思想に対応するオーデブレヒトに至る美学理論の展開の分析が中心となり、その前と後をフイードラーの芸術論とハイデガーの芸術哲学が挟むかたちを取っている。さらにその全体の思想の流れに対応するようなかたちで、西田の芸術論が取り上げられていると見ることができよう。

論文の中核をなす、第一章から第三章でのオーデブレヒトとガイガーの現象学的美学の分析とその比較は、論理の組み立ても堅固であり、文章表現も明快であって説得力がある。論者はそれぞれの美学の本質的な部分を、新カント主義のコーエンとフッサールの現象学を軸線として捉えることで、これを計測し照らし出そうと試みている。ただし論者のオーデブレヒト美学についての「独我論的解釈からの擁護」の企ては、オーデブレヒトの芸術作品の材料論にヒントを得てきているが、この課題が果たして十分に解明されたかどうかについては、若干問題が残るように思われる。そのためには、後期フッサールの立場からする、現象学的美学についてのさらなる検証が必要とされよう。

第四章と第五章は、現象学的美学の歴史的な分析からその展開の可能性を論じたものであるが、そこに論者のすぐれた独創的な見解が示されている。フイードラーの芸術論における心身相即の理論の西田哲学への影響関係についての言及はしばしば認められるところであるが、論者はさらにこれを一歩進めて、西田哲学という「芸術論」の可能性を主張している。この解釈は、将来に向けてその理論的発展が大きいと期待される。だがこれらの論点に結びつくハイデガーについての論証が十分に展開されていない憾みがある。

しかしこれらの不備も、論者の研究が深められていく過程でいずれ解明されていくはずのものである。緻密な分析に基づく美学史研究に加えて、さらに将来に向けての興味深い理論の発展の可能性を内包した本論文は高く評価することができる。ここに本論文を博士（文学）の学位に充分にふさわしいものと認定する次第である。